

## 終末前々主日 説教 「顔を立てる」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2020年11月8日

### 創世記 13章1～18節、マタイによる福音書 3章7～12節

コロナ禍の今、私たちは歴史的転換点に立っていると言われていています。そこで、その私たちに向かって語られているのがこの日の御言葉でもあります。それは、この日の御言葉が一つの時代の終わりを迎えた人々の、その次なる時代へと進む有様を物語っているからです。それゆえ、ここに登場するアブラムと洗礼者ヨハネの姿は、預言者の姿と重なります。時代の転換点でイスラエルの伝統にしっかりと立ち、人々を導いたのが預言者の系譜に属する者たちでもあるからです。そして、その時、預言者たちが見つめ、また伝えたものは誰もが望むバラ色の将来ばかりではありませんでした。ここでアブラムが予感し、また、洗礼者ヨハネが予告するように、その将来において人々が経験するであろうことは、神様の是か非かの判断であり、同時に、そこで突きつけられたものはその先に進む上での様々な課題であったからです。

ですから、一つの時代の終わりを見つめつつ、なおその先を見据える人たちは、そこで明らかな矛盾とそれに伴う対立を引き受けなければなりません。そして、その上で、神様の御心を人々に伝える使命に生きるのです。それゆえ、彼らの活動によって、社会の矛盾と人々の対立が露わにされもするのですが、ただ皮肉なことは、この露わにされた問題が解決へと向かうのではなく、新たな問題を生じさせるということです。しかし、彼らの目的は、矛盾や対立などの問題点を指摘し、糾弾することではありません。神様の御心に適う生き方へと人々をして立ち帰らせることであり、そして、人々にとってそれは、祝された幸いな時と場所へと移されることでもあるのです。それゆえ、立ち帰ったその時代時代の人々は、次なる時代も神様の祝福の内側を歩み続けることになるのです。

従って、私たちがもし御心に適った形で新たな時代に進もうとするなら、この日の御言葉から何かを掴み取らねばなりません。しかし、私たちがもし彼らと同じように次へと進もうとするなら、私たちは矛盾と対立の狭間に身を置き、その困難な課題を我が身に引き受けねばなりません。それゆえ、それはできれば避けて通りたいと思うのが人情というものでもあるのでしょうか。そして、御言葉の興味深い点は、そうした私たちの事情についてもしっかりと受け止めようとしていることです。市井に生きる大勢の人々も、またサドカイ派やファリサイ派の人々も、大勢の人々がこぞって洗礼者ヨハネのところにやって来たのは、それが、時代の終わりを見つめつつ、次に何かを期待する人々の姿であり、その姿とはつまり、「自分だけは」という自己本位の姿勢でもありました。ですから、そうした期待感だけが肥大化したところには、不都合な真実を引き受ける気概も覚悟もないわけですから、そこには新たな矛盾と対立だけがはびこることにもなるのでしょうか。

しかし、御言葉が語る将来には、今申しましたように、そういう一足飛びとは行かない私たちの事情がその背景として語られてもいるのです。それゆえ、この難しさが、私たちの御言葉の理解にも大きく影響を与えることとなります。そこで、私たちの多くは、振り回されないためには、御言葉の正しい理解が必要だと、そう考えます。けれども、マタイのこの箇所を巡って、専門家の間でも解釈が分かれるように、聖書の「正しい解釈」を巡っては、残された課題がまだまだ数多くあるのです。そのため、それぞれが矛盾を指摘し合い、結果、対立を生じさせることにもなるのですが、それはまさに御言葉そのものの背景にある対立と矛盾がそのような形で露わにされるから

です。しかし、そうしたこと自体、不思議ではありません。御言葉が露わにする様々な対立と矛盾は、それ自体消すことが目的ではないからです。けれども、この、「そこにある」ことが当たり前のところに、私たちは目を曇らせることにもなるのです。

それは、私たちがそうしたことがあってはならないと思込んでいるからです。そのため、私たちは、矛盾や対立を根気よく丹念に取り除こうとするのですが、残念ながらその試みに成功したまだ一人もおりません。それは、神様の御心は、私たちにとっての不都合な真実を消すことではないからです。ですから、私たちがこうして御言葉に聞き、神様の仰るとおりに真面目に生きていても、人生の様々な局面において、神様どうしてなのですかと、そう言いたくなることがあるのはそのためです。ただ、この思込みは、私たちの自信を失わせることとなります。そして、自らのこれまでの歩み、生き方についても、本来、御言葉が語りもしないネガティブな評価を下してしまい、結果、自らの将来についての悲観的な観測すら持つてしまうのです。それは、自分は救われない、それゆえに、御国への凱旋もままならない、との決めつけがありますが、深刻なことは、そうした決めつけが御言葉の正しい理解に繋がらないことです。

ただ、それは、私たちの本心から出たことではありません。なぜなら、私たちはやはり神様を信じ、信頼する者であるからです。ですから、そこから抜け出すためにも、御言葉の背景としてある矛盾や対立から目を逸らしてはなりません。痛かろうが、痛くなかろうが、御言葉の中に分け入り、そこに身を置くことしか、その先に進む方法はないからです。ですから、もし御言葉の正しい理解というものがあるとすれば、それは、アブラム、洗礼者ヨハネのように、言い逃れも言い訳も許されないとともに身を置いてみるしかありません。それは、痛みを負えばこそ、御言葉が語る真実に直接触れるこ

とになるからです。それゆえ、私たちはそこで感じるのです。それは、人としての営みには終わりがあっても、神様との関わりには終わりが無いということです。そして、そのことの確かさを告げ知らせるのが聖書の御言葉でもあります。ですから、私たちがもし今歴史の転換点に立っているとの自覚があるなら、私たちは、自らのこの信仰にしっかりと立たなければなりません。神様を信じ、信頼し、その御心にこの身を預けなければならないのです。そこで、この日、その弱い私たちのために御言葉が語ることが「悔い改め」ということでもあります。そこで、この「悔い改め」について、皆さんは、どのようなイメージをお持ちでしょうか。

「悔い改める」というギリシャ語の意味が「心を変える」という意味であることはご存じのことと思います。それゆえ、多くは、自分の間違いや失敗を後悔し、反省することだと、そう理解していることでしょう。そして、そう考えることは、もちろん、間違いではありません。私たちがそう理解するのは、聖書の御言葉に聞きつつ矛盾や対立などの諸問題を日々繰り返し見つめているからで、そして、その上で諸々の問題を我が身に引き受け、心を入れ替えることが大切だと、そう理解しているからです。ですから、一端立ち止まり、そのように自らを見つめることは、次なる祝福に与る上でとても大切なことです。なぜなら、神様の導きに委ね、新たな歩みを始めたアブラムの一族が、神様に祝され、その財産を大きくすることが許されたからです。しかし、大きくなったのは財産だけではありませんでした。それが対立の種となり、一族は危機を迎えることになったからです。そこで、アブラムが下した決断は、甥の口に良いものを与え、自分は見劣りのする方を選ぶということでした。その結果、危機的状況は回避されることになったのですが、しかし、そこでアブラムが選択したものは、貧乏くじを引いた程度のものではなく、その背後に隠されたもつと

大きな問題をも引き受けることになったのです。そして、そこで大事なことは、アブラムがその重大さを理解した上で口トにいいものを譲ったということです。それゆえにまた、アブラム一家の祝福は途絶えることなく与えられ続けられることになったからです。ですから、アブラム一家の成り行きだけを見れば、御言葉が語る場所は、いわゆる、損して得取れという類いのものだとも言えるでしょう。けれども、その場合の得とはどういうものなのでしょう。それについては、洗礼者ヨハネが向かうこの先を見る必要があります。

サドカイ派とファリサイ派の人々がヨハネの下にやって来たのは、洗礼を求めてのことではありますが、それは、時代の転換点において、彼らが清められ、新たなものにされることを強く願ったからです。そこで、ヨハネがユダヤ教指導者たちに語ったことが「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、誰が教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ」ということでした。そこで、日頃からユダヤ教指導者たちにいい印象をもっていない私たちは、「よく言った、ヨハネ」と溜飲を下げたくもなるのでしょうか。しかも、この直後、イエス様がこのヨハネの下を訪ね、洗礼に与ることになるわけですから、それだけにヨハネのここでの発言は大きな意味があったということです。しかし、この時のヨハネの発言にどれほど大きな意味があり、また、私たちがどれほど一時溜飲を下げたとしても、御言葉の背景にある矛盾と対立は、この一言によって完全に取り除かれたわけではありません。しかも、悔い改めを求めるヨハネ自身、この時何を見てこのような発言をしているのかと言えば、それは、イエス様の到来です。つまり、一つの終わりと一つの始まりを見て語ったヨハネのその一言は、すべてイエス様を見つめてのことであり、ですから、ヨハネが求める悔い改めとはつまり、このイエス様に心を向けるということです。けれども、それは、単に心を一新し、イエス様に目

を向けさえすればそれでいいということではありません。

「悔い改めにふさわしい実を結べ」と語るヨハネが、「良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」と語るように、私たちはこの「悔い改め」という言葉にネガティブな印象を持つのは、要求されるその厳しさに理由があるのでしょうか。けれども、ヨハネが、その説明として「私は、悔い改めに導くために、あなたたちに水でバプテスマ洗礼を授けているが、私の後から来られる方は、私よりも優れておられる」と語るように、悔い改めとは、ただ心を入れ替えることではなく、イエス様というその先に辿り着くための具体的行動を意味します。けれども、それは私たちに一足飛びに許されるものではありません。ヨハネが、自ら施す洗礼について「悔い改めに導くために」と語るように、ヨハネの悔い改めとは、イエス様に辿り着くため必要なものでもありましたが、そのヨハネがこのイエス様について「私より優れておられる。私は、その履き物をお脱がせする値打ちもない」と自分をこのイエス様の下に置き、その上で、「その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」と語るのです。このことはつまり、水によって悔い改めへと導くヨハネの洗礼と聖霊と火によるイエス様の洗礼とは、このように本質的にまったく違うものであるということです。

ですから、イエス様に辿り着き、その先に進むためには、この互いに相容れない部分を私たちが通り抜けなければならないということです。そして、この違いについては、洗礼を受けた私たちには、もしかしたら、了解事項なのかもしれませぬ。けれども、洗礼者ヨハネと同じ時代状況に生きた人々波動だったのでしょうか。私たちと同じ理解を持つことができたかということ、私は、できなかったと思います。そして、できないということはつまり、この、洗礼と悔い改めの議論は、そもそものところで人々の間に対立を呼び起こすものでしかなく、言葉にす

ればするほど、その矛盾ゆえに対立を深めるものであったということです。先ほど、イエス様に辿り着くには、一足飛びには行かないと言うことを申しましたのはそれゆえのこともありますが、ですから、私たちは分かっている、とそれで安心するのではなく、悔い改め、イエス様に至るためには、それを邪魔するものが現にこうして御言葉の中にしっかりと置かれているわけですから、この矛盾と対立をしっかりと認めた上で、それを乗り越えねばならないということです。

従って、洗礼者ヨハネが語るこの悔い改めは、ごめんなさいと言えはそれですむ話ではありません。実際に乗り越え、その先に進むためのものであり、悔いて心を改めるといった心の問題ではないということです。それゆえ、そこには具体的なものが要求されます。洗礼者ヨハネについて言えば、それはその先鋭化した言動ゆえに自らの命を自ら葬るということでもありました。そして、それは、ヨハネだけでなくアブラムも同じです。このように、矛盾と対立を乗り越え、イエス様に辿り着くということは、自らを殺し、自らを葬るようなそれだけ厳しく、激しいものでもあるのです。ですから、悔い改め、とは、この厳しさを我が身に引き受け、前へと進むことでもあります。それゆえ、それが、有り難いものであろうはずもありません。しかし、それだけにまた、この機会が与えられることは、ありがたいものだとも言えるのです。なぜなら、それは、ヨハネが今日の箇所直前で「悔い改めよ、天の国は近づいた」と語るように、イエス様と結びあわされ、その先委進む機会を備えてくださるのは神様ご自身であるからです。つまり、私たちが望んだり、ヨハネが願ったからということではなく、悔い改めの機会は、神様の一方的な恵みとして私たちに与えられるものであるということです。けれども、それゆえにまた、そこに私たちの抱えている様々な事情が現されることとなります。ですから、この恵みを恵みとして私たちが受け止めるためには、

その厳しさとどうしても向き合わなければならぬのです。ただし、その厳しさを洗礼を受けた私たちは一人で引き受けるではありません。

私たちは、物事を全て自分の考えなど、自分が持っているものから見つめるところがあります。それが一番自分が傷つかないし、安心できるからです。ですから、そのためにより多くを得よう、得たいと努力するのですが、時代が次に移り変わるといことは持っているものだけでは不十分であるということです。サドカイ派とファリサイ派の人々がイエス様を訪ねたのはそのためでもあります。ただ、イエス様がそれを厳しくたしなめたように、私たちは自力でその先へと進むことはできません。まただから、イエス様は、この世の矛盾、私たちの間に常にある様々な対立の中に立ち、私たちと共にその先へと進むために十字架についたのです。それは、イエス様自らの身をもって、その先が開かれることを私たちに伝えるためでもありました。そして、それは、そのイエス様が私たちと共にあることをはっきりと示すためでもあります。ですから、私たちに求められている悔い改めとは、そうイエス様と私たちとが共にあるがゆえに、私たちにはその先が備えられていると、私たちがこの事実に向き、実際に経験するということです。それゆえ、このことは、私たちの目の前にある矛盾や対立から目を逸らし、約束されることはありません。イエス様は、私たちと共にこの世を生きる上での難しさを担い、共に歩んでくださっているからです。それゆえ、悔い改めは、過去との連続性の中に身を置く私たちを、キリストの希望にあふれた明日へと向かわせます。ですから、私たちの進むべき次の時代は、イエス様がそうであったように、この世のすべてのものを私たちがそれすらをも恵みとして抱きしめるなら、新しい希望に満ちた歩みがそこから始まることになるのです。祈りましょう。